
穹界の剣

通信参謀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

穹界の剣

【Nコード】

N21200

【作者名】

通信参謀

【あらすじ】

人々が資源を食い潰した地球を捨ててからおよそ2000年が経過し、人類は銀河系に広く拡散していた。

1000ほどの国家が成立しており、統合と分離、それに伴う戦乱を繰り返していた。

中でもこの頃、アンブロワーズ恒星系連邦共和国とグロスティア連合王国、2つの覇権国家はその間にある地域の主導権を巡り、対立を深めていた。

両国間で緊張が高まる中、ついに連邦軍は行動を開始する。

2010年12月2日を以てタイトルを『漆黒の凱歌』から『穹
界の剣』に変更しました。

第1話 連邦軍進駐（前書き）

私の4本目の長編です。

拙い作品ですが、よろしくお願いします。

第1話 連邦軍進駐

黒い空間に、黒い塊が浮いている。896の面で構成された双胴の構造体は、全長2310メートル、全幅778メートルになる。

軍艦だ。それも大国の象徴たる重戦艦である。

アンブローズ恒星系連邦共和国の誇る、『フェレーション』級重戦艦『ヴィンチェンツォ・スカンディアーニ』は、同じく『フェレーション』級重戦艦15隻、『ルスラン・フォードロヴィチ・ホムートフ』級駆逐艦16隻を従え、オノフリオ自治恒星系の惑星ブルル衛星軌道上の栈橋（艦隊や船舶の拠点となる施設）に、恒星オノフリオの光を受けながら入港した。

オノフリオ自治恒星系への進駐は、なんの齟齬もなく順調に進んだ。

連邦軍第1艦隊集団総旗艦『ヴィンチェンツォ・スカンディアーニ』艦橋で、フィリップ・ハンゼン大將は、頬杖をついていた。これは、全く面白くない任務だ。

重戦艦16隻

軽戦艦32隻

ミサイル艦16隻

巡航艦32隻

駆逐艦96隻

工作艦32隻

補給艦32隻

合計256隻

これが、ハンゼン大將の麾下にある艦隊である。この第1艦隊集団と命名された部隊の任務は、オノフリオ自治恒星系を併合することにある。

オノフリオ自治恒星系は、特徴がないのが特徴という小国だ。豊

富な資源があるわけでも、工業力があるわけでも、食料生産力が大きいわけでもない。この国の周囲には多数の自治恒星系が群れをなしているが、はつきり言って、オノフリオ自治恒星系はずば抜けて存在感が薄い国だ。

ほどほどの人口にほどほどの資源、ほどほどの食料生産力、ほどほどの工業力とほどほどの軍事力……。傍から見てこの国の政治家に、将来の発展についてやる気やビジョンがあつたのか、問い詰めなくなる。

背後から、1人の女性がハンゼン大将に声をかけた。

「長官が何を考えているか、当てましようか？」

第1艦隊集団参謀長イレネ・セー二少将だ。

「オノフリオ自治恒星系の政治家に向けて、『テメエらやる気あるのか！？』でしようか？」

ハンゼン大将は振り返りながら答える。

「ほぼ正解だ。間違えを指摘するなら本国の大統領に向けて、『こんな国占領しても経費の無駄だ！こんなことするぐらいなら給料上げる！』とも思っている」

「賃上げ要求ですか？」

「ああ、軍人は給料は安いしそのくせ保険料はやたら高いからな。せめて賃上げぐらいはな」

「しかし、保険料の5割は軍持ちですから、贅沢を言っては駄目ですよ」

言いながら、セー二少将は書類の束を差し出した。

「降伏文書と連邦加盟のためね各書類です。ご確認を」

ハンゼン大将は渡された書類を見て、問題がないことを確認すると、立ち上がる。

「それでは行こうか」

「はい」

これから調印式である。

艦橋から1番近いエアロックまで、225メートル。歩いて3分

とかからないが、全長2310メートルの艦内には各所にモノレー
ルが走っており、それを利用できるし、その方が歩くより早い。

途中で連邦政府代表のラッセル・ティム・アイアンズ副大統領と
合流し、棧橋に降り立った。

調印式の会場には、オノフリオ防衛艦隊使用区画の士官食堂が供
され、3人が入室した時にはすでに準備万端だった。

オノフリオ自治恒星系側からはシミオン・ジョニー・リリー首相
と、総参謀長のヨンネ・エーロ・ペトサルミ大將が代表として出席
した。

調印式は滞りなく行われた。要するに差し出された書類にサイン
するだけだから、よほどのことがない限り滞るはずがない。

規定の方針ではこの後、第2艦隊集団が進駐し、第1艦隊集団は
旧オノフリオ自治恒星系の隣国、フェルステル自治恒星系に駒を進
めることになっている。

そのために、調印式終了の直後から、各艦隊で補給艦に接舷し、
推進剤や糧食、酸素などの物資を補給していた。

第1艦隊集団に配属されている32隻の補給艦は、全て『サムエ
ル・A・ケンツピ』級である。

その艦容はコンテナに居住ブロックとエンジンブロックを付け足し
たような、特異な姿である。全長1833メートル、全幅733メ
ートルの艦体には、正規で176万トン、外付けコンテナを使用し
た過積載状態なら、276万トンもの補給物資を搭載できる。

各補給艦は担当の艦隊の艦艇に接舷すると、次々に液体酸素、糧
食及び水、推進剤などの物資を送り出す。

ちなみに補給艦隊指揮官は第1艦隊集団の兵站参謀の兼任で、作
業中、兵站参謀のルーペルト・アッサール・ヴァレニウス中佐は自
らの旗艦『ドーアナイ』にて指揮を執っている。

やがて、『ヴィンチェンツォ・スカンディアーニ』に『ドーアナ
イ』からの連絡艇が到着し、ヴァレニウス中佐が艦橋に姿を見せる。
ヴァレニウス中佐は敬礼すると不動の姿勢を作り、ハンゼン大將

に報告した。

「全艦補給作業完了、進撃準備よし！ 補給艦隊離舷完了、進撃準備よし！」

「状況を把握した、補給艦隊は所定の位置に戻り、第011艦隊を追及せよ！」

「了解！」

互いに敬礼を交わすと、ヴァレニウス中佐は速歩で艦橋をあとにした。

第1話 連邦軍進駐（後書き）

新連載です。

すでに他に2本の連載があり、3本を同時にこなせるかというと、私の脳の処理能力では厳しい気がします。

ではなぜ新連載を始めたのか？ と聞かれると、「久々に宇宙戦争物を書きたかった」というだけです、はい。

まあ、以前短いやつを2本書いたことがあったのですが、もう少し煮詰めてもよかったかなあ。なんて思いました。

更新は不定期ですが、よろしく願います。

ご意見ご感想お待ちしておりますので、ご遠慮なくお寄せください。

第2話 安全保障会議

オノフリオ自治恒星系で行われた調印式から、標準時間で26時間が経過した頃、その知らせはグロスティア連合王国の首都グロスト恒星系にもたらされた。

この知らせは連合王国政府を震撼させた。

というのも、グロスティア連合王国とアンフローズ恒星系連邦共和国は、こね30年、対立を深めていた。

周辺の小国を統合しつつ版図を拡大した両国が国境を接したのが、122年前である。

その時、狭間に挟まれたのが、旧オノフリオ自治恒星系を含む、自治恒星系群だ。

銀河系の中心方向では国境を接する一方、外縁方向では17の自治恒星系が取り残され、両国はどちらがその覇権の空白地帯で主導権を握るかを巡って、対立し、互いに牽制しあっていた。特にこの30年は対立が尖鋭化しており、この方面での軍事行動には、互いに神経を尖らせていた。

この自治恒星系群問題が、そのまま全面戦争の火種になるのではないかという事態は、これまで幾度も存在した。

例えば最近では30年前、対立の尖鋭化を招いた『ベネディクト・プラン漏洩事件』だ。実は連邦軍は予てより連合王国との全面戦争に備え、ベネディクト・プランと呼ばれる作戦を策定していたのだ。その計画は連邦軍の全力を挙げての、連合王国領内への大規模な侵攻が骨子であり、2国間の関係を悪化させるには十分な内容だった。

ベネディクト・プランから身を守るには、こちらが機先を制するしかない。

単純だが真理を衝いた考えである。連合王国としても国境の防備を固めるとともに、軍拡を開始した。

連邦もまた、有事の際に機先を制し、ベネディクト・プランを成功させるべく、軍拡に走った。

両国の軍拡は、むしろ周辺国が不安視し、グスターク共和国をして『国家間平和維持会議』の開催と、軍縮条約締結を行わせるまでに加熱していた。国家間平和維持会議には259カ国が参加した。もはや自治恒星系群問題は、当事者たちだけの問題ではなくなっていた。

そんな中での、今回の連邦軍によるオノフリオ恒星系進駐である。両国間の緊張を過熱させるには、十分すぎる事件だ。

連合王国首相フェリックス・マシュー・アースキンは、フェルステル自治恒星系のラインホルト・ツェベライ大使との会食を終えたばかりだったが、報告を受けた直後に安全保障会議を招集した。これは首相、外務相、国防相、財務相、国土相、通産相、王立軍参謀総長で構成される非常設の会議で、安全保障上の障害が発生した場合に、臨時で招集される。

30分でアースキン首相、ロベルト・ボリソヴィチ・コスイフ外務相、チーム・レイヨ・ナルヒ国防相、アーロン・エスピノ・ジャニェス財務相、サブリーナ・ルイージ国土相、ブレソール・アルベール・ミユラ通産相、ウーヴェ・レオンハルト・ベルガー参謀総長の7名が会議室に揃った。

アースキン首相は前向き無しに言った。

「さっそくだが、自治恒星系群の方面で、連邦軍の艦隊集団が行動している。オノフリオ自治恒星系はすでに連邦に併合された」

ナルヒ国防相が、現在国防省が把握している情報を伝える。

「現在、オノフリオ自治恒星系方面に1個艦隊集団、連邦領ジョンストン恒星系に同じく1個艦隊集団が展開しており、我が国と接する各連邦領恒星系にも、艦隊が集結しつつあり、こちらは少なくとも6個艦隊集団規模となっています」

完全に臨戦態勢である。そもそも普通、平時の最大編成は艦隊で、

艦隊集団は戦時編成の部隊である。連邦は完全に一戦交える覚悟なのだろう。

コスイフ外務相が発言を求め、許可されると外務省の観測を述べた。

「外務省は今回の連邦軍の行動について、瀬戸際外交と見ております」

この行動はブラフであり、軍事的示威行為を仕掛けることで、自治恒星系群問題での連合王国の譲歩を引き出すつもりだと、外務省は考えている。

アースキン首相は次に、ベルガー参謀総長に聞いた。

「ベルガー元帥、参謀本部の意見は？」

「連邦軍は予備役将兵の召集を開始しており、また、オノフリオ恒星系に進駐した艦隊集団は、すでに移動を開始しております。これはブラフではないと、第2部が分析しています」

王立軍参謀本部第2部は、情報の収集と分析を担当している。彼らはすでに連邦軍が開戦を決意していると分析したのだ。

ミユラ通産相が続けて発言する。

「どちらにしろ、連邦の行動は6年前に締結された中立協定第2条『自治恒星系群諸国の主権及び領土の不可侵』に違反しております。ここは断固たる措置をとり、この問題での我が国の不退転の意志と国際道理を、明らかにするべきではないでしょうか？」

アースキン首相には、正論に思えた。瀬戸際外交なら、自治恒星系群問題で一步も退かない、圧力には屈しないという態度を示すことで、意図を阻止できる。もし本当に一戦交える気なら、本国の外で迎え撃つべきだ。

「分かった。まず手始めに、1个方面艦隊を編成し、フェルステル自治恒星系に差し向けてくれ。もちろん、そのあから、複数個の方面艦隊を新たに編成する可能性もある。準備にかかってくれ」

歴史的に見て、アースキン首相のこの決断が、開戦を決したと言っても過言ではなかった。

第2話 安全保障会議（後書き）

書いていてふと思ったのですが、近年は君主制を廃止した国はありますが、新たに君主制を取り入れた国はありません。

果たして2000年以上未来の宇宙で、君主制が成立する余地はあるのでしょうか。

ちらつと出てきたベネディクト・プランは次話で詳しく触れる予定です。

また、離れた恒星系同士で素早く情報のやり取りをできる技術も次話で触れる予定です。

連邦、連合王国、自治恒星系群の位置関係は、概ね、ドイツ、フランス、ベネルクス3国の位置関係をイメージしてくだされば良いと思います。

それではご意見ご感想お待ちしております。

第3話 ある連邦提督の不安

連邦軍第1艦隊集団は特殊航法——いわゆるイマジナリー航法——を繰り返し、フェルステル自治恒星系に肉薄した。

特殊航法は一種のワープだ。その要点は疑似宇宙を作り出すことにある。俗称のImaginaryが示すのは、虚数という意味だ。特殊航法とは虚数時間内に作った疑似宇宙がある程度膨張し、トンネル効果を経て真性宇宙に出現する際に、疑似宇宙に乗る航法だ。疑似宇宙によって真性宇宙の空間が押しつけられ、虚数時間中に疑似宇宙が膨張した距離だけ、空間を跳躍することになる。

疑似宇宙は真性宇宙の斥力により瞬時に消滅する。

1回の跳躍距離は短いが、この疑似宇宙の構築を繰り返すことで、短時間で、しかもローレンツ収縮の影響を受けることなく、長距離を移動できる。

これを利用し、電波を疑似宇宙に乗せて跳躍させる技術が、いわゆるイマジナリー通信で、これにより人類は数千光年彼方の情報すらも、短時間で共有できるのだ。

特殊航法を繰り返す第1艦隊集団第014艦隊の旗艦『ヴァウドラ』の艦橋では、艦隊司令のフレードリック・レンナルト・フォシユマン少将と、彼の参謀長アダム・ゲラシム・ジヨチキン准将が難しい顔をしていた。

別に第1艦隊集団に問題があるわけではない。フェルステル自治恒星系は弱小国家であり、多少の抵抗があつたところで鎧袖一触だ。第1艦隊集団はそれほどの戦力を持っているのだ。

特に16隻の重戦艦は全て『フェデレーション』級に属する新鋭艦だ。

『フェデレーション』級重戦艦は16インチカートリッジガスレーザー砲14門を装備し、なおかつ艦隊集団指揮能力も持つ、2年

前から就役が始まった新進気鋭の重戦艦である。

その特徴はなんと言っても、圧倒的な加速度にある。光速の1000分の1、標準秒速約300キロメートルでの、通常推進による最大加速度は、標準時間で毎秒150キロメートルと、驚異的な数字を達成している。これは軽戦艦並みの加速度である。加速するに従って増大する質量を押しつける高いエネルギー効率の、新世代の推進機が可能にしたのだ。

だが、『フェデレーション』級には唯一の泣きどころがあった。新型推進機に艦隊集団指揮能力も相まって、増大したコストである。建造費は前級『アルトウル』級の1.5倍、建造期間も約4年と、『アルトウル』級と比べ半年ほど長くなる。

当初、退役予定の旧式重戦艦『ウーゴ・セレーニ』級、『ヤルマリ』級計64隻の代艦として、同数が建造される予定だったのが、余りにコストが嵩み過ぎ、半数の32隻で打ち止めとなってしまうた。

しかし第1艦隊集団にはその高速重戦艦の半数が配備されているのだ。

フォシユマン少将自身が指揮を執る第014艦隊も、ミサイル艦16隻を擁する打撃力に秀でた艦隊だ。16隻は全てが『レアル・アドミラル・イエウスタツイウ・セバステイアン』級に属し、全長2016メートル、全幅336メートルの艦体に1344セルものVLSを備えている。そこには4032発の長距離艦対艦誘導弾を納め、敵艦隊への圧倒的な飽和攻撃を行える。

フォシユマン少将とジョチキン准将が難しい顔をしているのは、自身の持つ戦力への不満ではなく、作戦全般への不満である。

現在の連邦軍の動きは、ベネディクト・プランに限りなく近いものだ。

ベネディクト・プランは前統合作戦本部総長ベネディクト・ダグラス・モンタギュー大將が、対連合王国用に立案した計画である。連合王国と直接国境を接する、インナー・エリア（銀河系の中心

側)のエマヌエル恒星系からチャルレス恒星系まで26の恒星系は
防御持久に徹し、一方でアウター・エリア(銀河系の外縁側)では
4個艦隊集団規模、32個艦隊1024隻の包囲部隊が一気に自治
恒星系群の中立を侵し、連合王国領内になだれ込む。そして連合王
国首都グロスト恒星系を占領し、その後はチャルレス恒星系まで連
合王国領内を打通、王立軍主力を包囲殲滅し、3カ月で勝敗を決す
るという、壮大な戦略だ。

しかし、現在の行動はベネディクト・プランに近いだけで、実践
しているわけではない。

まず、連邦政府の中に開戦するべきか否か、この期に及んでもま
だ迷いがあつた。

そしてモンタギュー大将の後任者、現統合作戦本部総長で『Ta
ke a chance』のあだ名を持つ、ゲアト・アルブレヒト・
シャウエルテ大将が、ベネディクト・プランに懐疑的だったことも
あり、アウター・エリアへの戦力投入が中途半端なのだ。

当初予定の1024隻の内訳は

重戦艦64隻

軽戦艦128隻

ミサイル艦48隻

航空母艦16隻

巡航艦128隻

駆逐艦384隻

工作艦128隻

補給艦128隻

であるが、今回投入予定の戦力は

重戦艦48隻

軽戦艦96隻

ミサイル艦32隻

航空母艦16隻

巡航艦96隻

駆逐艦 288 隻

工作艦 96 隻

補給艦 96 隻

合計で 24 個艦隊 768 隻。3 個艦隊集団規模だ。なんとも中途半端になってしまった。

これでは開戦したとしても、攻勢は早期に頓挫するだろうことは、容易に判断できた。ベネディクト・プラン本来の予定兵力すら、この計画を達成し得る最低の兵力なのだ。4 個艦隊集団 1024 隻の後方には、1 艦隊集団 256 隻を拘置するはずが、それも存在しない。768 隻が全てだ。

自治恒星系群侵攻前に、センター・エリア（インナー・エリアとアウター・エリアの中間）での陽攻が行われていないのも、問題だ。この陽攻には、2 つの意味がある。1 つは王立軍の注目をセンター・エリアに集め、アウター・エリアを手薄にさせること、もう 1 つは王立軍主力をセンター・エリアに集め、包囲環に収めることだ。

その陽攻を怠るということは、アウター・エリアを進む連邦軍主力と、そこを守る王立軍主力が、正面からぶつかることになる。そして、王立軍を包囲環に収められなくなるということだ。

主力同士の正面戦闘では、仮に勝っても連邦軍も大打撃を受け、その後の戦線が停滞しかねない。

フォシユマン少将とその幕僚たちには、不安が募っていた。

第3話 ある連邦提督の不安（後書き）

イマジナリー航法、イマジナリー通信の技術は、あの説明では少し分かりにくいかもしれません。図を使えば説明しやすいのですが……。

虚数時間云々については詳しくは、ステイーヴン・ホーキング氏やジエームズ・ハートル氏の学説等をご覧ください。

そして知っている人が読めば分かると思いますが、ベネディクト・プランは実はかつてのドイツ帝国の、シュリーフェン・プランほぼその物です。

前回のあとがきで、位置関係を独、仏、白蘭廬3国に例えましたが、作戦まで同じようになってしまいました（連邦軍のベネディクト・プランに対する扱いも、シュリーフェン・プランに近いですが）。ちなみにモンタギュー大將は作中に本人が登場する予定はありません。

銀河系をインナー・エリア、センター・エリア、アウター・エリアと分けたのは方向や位置関係を分かりやすくするために、地球上の方位のようなものです。

連邦や連合王国がの領土が銀河系を横断しているわけではありません。

それでは、ご意見ご感想お待ちしております。

第4話 ある王立軍人の懸念

王立軍参謀本部では、すでに連邦軍の次なる目標がフェルステル自治恒星系であることは、掴んでいた。従って、ベネディクト・プランを阻止するためには、ここに艦隊を派遣し、連邦軍を撃破すべきということになった。

ダメトリオ・ドゥーニ大將を司令長官とする、リューディア方面艦隊が編成された。

方面艦隊は連邦軍における艦隊集団に相当し、戦時編成の部隊である。兵力もやはり8個艦隊256隻が基本となる。

兵力が同等なのは別に示し合わせたわけではなく、単純に技術的な問題で、これ以上の艦艇を持たせても指揮できないのだ。この時代、256隻というのが、1人の指揮官が指揮できる限界だ。

リューディア方面艦隊の戦力は、

重戦艦32隻

軽戦艦16隻

ミサイル艦16隻

巡航艦32隻

駆逐艦96隻

工作艦32隻

補給艦32隻

合計256隻。自治恒星系の1つや2つ、楽に制圧できる戦力だ。だが今、ドゥーニ大將の手元にあるのは、この256隻の艦隊のうち、2個艦隊64隻だ。王立軍の作戦基調は外線作戦であり、接近経路を分け、主戦場で一気に集中させるのだ。

外線作戦を採るには、それなりのわけがある。

王立軍がよく指摘される弱点に、後方支援艦艇の能力不足がある。特に王立軍の補給艦の物資搭載量が、他国の同クラスの艦に比べ少量なのは、よく知られている事実だ。

これは王立軍は基本的に防衛主体であり、長距離遠征を考えていないためだ。この欠陥を王立軍は、各地の棧橋に物資を集積することとで、補っていた。

256隻が一度に補給を受けられる規模の棧橋を持つ惑星は、連合王国内にも幾らもない。十分な積載量の補給艦がいれば、棧橋の能力不足を補えるが、それを持たない王立軍としては、接近経路を分散するしかない。

ドゥー二大將は、そのことが不満だった。

彼は王立軍内でも積極的な外征や予防戦争を主張する、外征派と呼ばれる派閥に属しており、予てから補給艦の能力向上を主張していた。

それだけに、補給艦の能力不足から手勢を分散しなくてはならないのが、不満だった。

この時代、外線作戦は必ずしも優位ではない。それは、広大な宇宙では思うように通信を行えず、連携に難が生じるからで、最悪の場合、戦力の逐次投入と各個撃破という事態を、知らず知らずのうちに招きかねないのだ。

ドゥー二大將ら外征派と、専守防衛を主張する防衛派の抗争は、すでに20年以上になる。ベネディクト・プランの存在が明るみになった頃から、王立軍内部ではこれにどう対抗するか、議論が繰り返され、その結果が2派の対立である。

今のところ、補給艦の能力不足が是正されていないことから分かる通り、防衛派が優勢である。参謀総長のベルガー元帥も一応は中立だが、どちらかと言えば、防衛派寄りだ。

この派閥争いが、リユーディア方面艦隊の人事に大きく影響していた。

まず、勢力の均衡を保つために、司令長官に外征派のドゥー二大將を据えた。

そして、外征派のドゥー二大將が先走るのを阻止するために、次

席指揮官には中立の立場を採るエーリツキ・アニール・アイキオ中将を着任させた。

リューディア方面艦隊BF-100（王立軍においては、戦闘部隊をBF、支援部隊をSFの符丁で表す）艦隊は、コンスタンツ恒星系は惑星ザルツの衛星軌道上にあった。

この惑星ザルツは平均気温-122 という、極寒の星だ。宇宙から見るその姿は純白である。

雪ではない。全土が乾燥した砂漠気候であり、Salzの名が示す通り、地表のほとんどが塩で覆われているのだ。惑星ザルツ産の岩塩と言えば、世界中の美容家や健康家、料理家の憧れの的だ。

だが、アイキオ中將はあいにく美容にも食にも興味は乏しい。健康管理には一応気を使っているが、それは軍人の務めとしてであり、過度な健康志向ではない。従って、彼の興味が白亜の天体に向くことはなかった。

アイキオ中將は、自らの旗艦に積まれていく兵器を見つめていた。傍らではBF-100参謀長のゴンザレス・ハルフル・イバルリ准將が、同じようにその兵器を見つめている。

『AM21』と記されたそれは、ミサイルだ。ミサイル攻撃というミサイル艦のイメージが強いが、戦艦や巡航艦にも、VLSは存在する。

AM21は対消滅弾頭であり、本来なら国家間平和維持会議で使用を禁止されている兵器だ。戦地に赴く艦にこれが搭載されるということは、何を示すのか。

「このような代物を使ったなら、我が国は世界中から非難されるな」アイキオ中將の言葉に、イバルリ准將が応える。

「ですが、AM21の配備はあくまで抑止力であり、使用しないとの通達です。心配は無用でしょう」

「我が軍の基本方針は専守防衛だ。しかし今回の行動は予防戦争のそれではないか？ 司令長官も外征派だ」

「たしか、ブライテンバッハ作戦部長がねじ込んだ人事でしたね」

参謀本部第1部を束ねる、作戦部長コルネリウス・ゲアト・ブライテンバッハ大將は、外征派の中心人物である。それだけに、今回の司令長官人事は、劣勢の外征派が巻き返しのためにドゥー二大將の起用を主張し、両派の拮抗を望むベルガー元帥が、それを承諾したと言われる。

「それだけに、ドゥー二大將は功を焦っているだろう」
「なるほど」

もし戦闘が惹起し、それに勝利したなら、外征派は巻き返しを図れよう。

まず、国外で勝利しベネディクト・プランを頓挫させれば、外征派の主張が正しいことを証明できる。

そしてその勝利の指揮官が外征派なら、やはり外征派の発言力強化につながる。

「我が国が汚名を着ぬためにも、我々がしっかりとおさえなくてはな……」

そう言うアイキオ中將の表情は、懸念に曇っていた。

第4話 ある王立軍人の懸念（後書き）

何だかけっこう順調に書き進めていますが、いつものパターンだとこのあと、失速するんですよ……。
なんか、怖いな。

連邦軍の艦隊集団と方面艦隊の戦力が同等なのは、作中では技術的な問題としましたが、ぶっちゃけ横着です。
いちいち戦力の計算をするのが面倒なもので……。

王立軍の艦隊符丁は、単純にB FはB a t t l e f l e e t、S FはS u p p o r t f l e e tの略です。

それではご意見ご感想お待ちしております。

第5話 抗戦準備

フェルステル自治恒星系は、小さな農業国家だ。人口は2000万ほどこで、自治恒星系群で消費される食料の7割は、この国の農業プラントで生産されている。工業力には特に見るべき物はない。軍事力についても特筆することではなく、軽戦艦『ノルトリヒト』を総旗艦とし、小型艇が主力である。駆逐艦以上の軍艦は総旗艦『ノルトリヒト』を含め全て輸入艦で、ミサイル艇、哨戒艇などは国産だ。今、フェルステル自治恒星系は揺れている。もちろん物理的に揺れているわけではなく、この場合、政治的に不安定なのだ。

これまで連邦と連合王国が、フェルステル自治恒星系を含む自治恒星系群での主導権を巡り争っていたが、両国と自治恒星系群諸国の間で、6年前に中立協定が結ばれて以来、小康状態になっていた。中立協定とは、自治恒星系群諸国の領土保全、主権尊重を取り決めた協定である。国家間平和維持会議で軍拡に待ったがかかった際に、自治恒星系群の1国、バートランド自治恒星系が音頭を取り、長い交渉の末に締結に成功した物だ。

今回、連邦はその中立協定を一方的に反故にし、3個艦隊集団規模の大部隊で、自治恒星系群に侵攻を開始した。

徹底抗戦か、無血降伏か。未曾有の国難にフェルステル自治恒星系政府の意見は真つ二つに割れ、連日の激論がなされた。

3日間の論戦の末、アント・アリ・ライツコネン大統領が非戦派だったこともあり、無条件降伏が決定した。

だが、オリガ・デナソヴナ・イシャエワ首相を中心とする主戦派はこの決定に不服であり、翌日、総参謀部を煽り、軍事クーデターによる政府転覆を行った。どうやらイシャエワ首相と軍の間に、事前に何等かの密約があったらしく、迅速な行動だった。

新たな暫定政府の主張は徹底抗戦だった。

これに、今度は総参謀部が不満を持った。彼らが軍事クーデター

に加担したのは、あくまで降伏前に連邦軍に一撃を加え、同じ降伏にしても少しでも有利な条件を引き出すためだった。そのためには、一撃後も軍は余力を残して降伏する必要があり、徹底抗戦など論外だった。

フェルステル国防軍総旗艦『ノルトリヒト』は、この国が保有する唯一の軽戦艦だ。バートランド自治恒星系で建造され、すでに30年になるが老朽艦だが、元の設計が優れていることもあり、未だに第一線で働けるだけの实力を持っている。

国防艦隊司令アントン・フルマンティ中將は、幕僚を第1会議室に集めた。

「こう何度も呼び出して悪いが、今度は暫定政府と総参謀部が揉めているそうだ」

フルマンティ中將は見るからに不機嫌そうだ。集まった参謀たちも、どちらかと言えば不機嫌だ。脅威は目前まで迫っている。今は内輪揉めをしている場合ではない。

参謀長アドルフ・エーヴェルト・メルベリ大佐に関しては、不機嫌というよりもはや呆れている。現実が見えていないという点では、イシャエワ首相も総参謀部も、大して変わらないのではないか。

「我々はどちらに付くのですか？」

作戦参謀シャラン・イミール・クロック中佐の質問、メルベリ大佐が答える。

「それは、総参謀部だろう」

フルマンティ中將もそれに頷く。

「徹底抗戦など愚の骨頂だ。我々は余力を残して降伏する必要がある。諸君には、いかに損害を抑えつつ敵を打撃するのかわかっていることを踏まえ、作戦を策定しつほしい」

中央がどれだけ揉めようと、前線將兵は戦いのための準備をこなしてはならない。それが祖国を守る術であると同時に、自身の命を

守る術でもあるのだ。

フェルステル自治恒星系の国防軍の戦闘部隊は、『ノルトリヒト』以下軍艦で構成される国防艦隊と、ミサイル艇、哨戒艇で構成される根拠地艦隊、要塞を守る守備隊で構成され、艦隊にはそれぞれに陸戦部隊が1個大隊ずつ配属されている。

それぞれ国防艦隊、要塞守備隊の指揮官は中将、根拠地艦隊の指揮官は少将が務める。

中でも1番最初に連邦軍と交戦するのは、クロスト・アロイジウス・レップラー少将の第3根拠地艦隊。次いでもっとも外縁に位置するヘイノ・ラウリ・イサカ中将の第3国境要塞、自主独立を守る最前線の、通称『インディペンデンス要塞』である。

つまり、この2部隊は真つ先に犠牲となる。

イサカ中将とレップラー少将は、作戦について協議を行っていた。手元にある戦力は、第3根拠地艦隊が

ミサイル艇12隻

哨戒艇20隻

合計32隻

そして第3国境要塞は

10インチカートリッジガスレーザー砲12門

5インチカートリッジガスレーザー砲20門

20ミリターボガスレーザー砲68門

哨戒艇6隻

である。

このうちミサイル艇は全て『MB34』級、哨戒艇は全て『PT17』級である。武装は前者がSSM4発、20ミリターボガスレーザー砲2門、後者が3インチカートリッジガスレーザー砲1門、20ミリターボガスレーザー砲3門となっている。もちろん、単独では重戦艦はおろか、駆逐艦にも勝てない戦力だ。

しかし、それでもフェルステル自治恒星系にとって、貴重な戦力だ。有効活用するためには、念入りに策を練る必要があった。

第5話 抗戦準備（後書き）

日本では駆逐艦は軍艦ではなく軍用艦でしたが、作中では軍艦籍で統一しています。

ちらつと出てきたバートランド自治恒星系は、次話で詳しく触れます。

それではご意見ご感想お待ちしております。

第6話 バートランド

フェルステル自治恒星系と国境を接する国に、バートランド自治恒星系がある。この国はフェルステル自治恒星系とは対照的な国家で、必要な食料の8割を輸入に頼っている。

一方で工業力は高く、特に主要産業の造船には定評があり、多くの国でバートランド自治恒星系製の船舶が行き交い、軍でもこの国で建造された軍艦を採用している。フェルステル自治恒星系国防軍の総旗艦『ノルトリヒト』もバートランド自治恒星系製だ。

バートランド自治恒星系自体も、その技術と船舶輸出で手に入れた豊富な資金に物を言わせ、優秀な艦艇を他の自治恒星系と比べても、多数配備した軍事国家である。

自治恒星系群の中心的存在であり、あるいはこの国に領土的野心があつたのならば、連邦や連合王国と並ぶこの地域における第3の覇権国家として、覇を争っていたかもしれない。

だが、バートランド自治恒星系の国民は、伝統的に平和指向であり、武装中立を国是としている。危機が迫らない限り自ら進んで戦端を開くことはない。

だが逆に、危機が迫れば敢然と立ち向かう気質も持っている。

例えば、37年前に起きた『クシー危機』である。自治恒星系群のクシー自治恒星系が、連合王国と紛争に及んだ事件だ。

ことの発端は、誤って領宙を侵犯してしまった連合王国籍の資源採掘船を、クシー国防軍が拿捕し、資源採掘船と船員を抑留したことである。

返還要求を無視したクシー自治恒星系に対し、連合王国は軽戦艦、巡航艦各16隻を基幹とする2個艦隊を派兵し、交戦状態に突入した。

この時バートランド自治恒星系は、国防軍艦隊をクシー自治恒星系への援軍として送り出し、王立軍艦隊を足止めしている間に、両

国政府と掛け合い、連合王国の謝罪と引き換えに採掘船と船員全員を解放させた。クシー自治恒星系は、フェルステル自治恒星系からの食料の輸入経路であり、この地域の安定がバートランド自治恒星系には、必要不可欠だったのだ。

事件は2カ月足らずで収束したが、あるいは長引けば連邦軍の介入を許し、連邦、連合王国間で全面戦争になっていたと言われる事件だ。

自治恒星系群が、まがりなりにも独立を保っているのは、連邦、連合王国が互いに牽制しあったのみならず、バートランド自治恒星系の存在が大きかったのだ。

バートランド自治恒星系は、『軍国バートランド』と言われるほどの、軍事国家である。現在の元首は国防軍総帥のコンスタンツ・G・ボーフォート元帥だが、軍国化は何も彼の代から始まったわけではない。バートランド自治恒星系の建国以来の国策は、武装中立である。周囲の自治恒星系とは比べ物にならない軍備を有し、国防費は国家予算の32パーセント内外にもなる。これが戦時になると国家予算の70パーセントを投入できる仕組みだから恐ろしい。

ボーフォート元帥は、望んで元首となったわけではない。彼はむしろ、自らの本分は軍人であり、政治に関しては門外漢であることを自覚していた。

それでも文民統制を無視してまでも、元首となってしまうたのは、この国の政治家が無能だったからとしか、言いようがない。

そもそも文民統制は政治家が軍人の上に立つ以上は、原則として政治家に、軍人以上の資質を求めることになる。国家とは国民の利益と福祉を追求する営利団体だからだ。

効率的に利潤を得るには、より優れたリーダーを据えるのが、合理的であり当然のことである。従って、軍人が政治家より優れているのなら、軍人が国家を指導した方が国民のためになるという理論になる。

ボーフォート元帥は、優秀な政治家の出現を望んでいた。本当に信頼でき、国家や国民を安心して任せられる人物に国政を委ね、自らは軍事に集中したいのだ。

周辺国との摩擦は、ない。むしろ大きな軍事力を持たない周囲からは、この地域が連邦、連合王国の間で中立を保つ要石として、頼りにされている。

そこで今回の連邦軍侵攻である。オノフリオ自治恒星系は呆気なく併合され、フェルステル自治恒星系に危機が迫っている。

明日は我が身だ。自治恒星系群諸国が、バートランド自治恒星系の動きに、注目した。果たしてフェルステル自治恒星系に、救援艦隊を送るか否か。

バートランド自治恒星系が軍事国家とは言え、所詮は自治恒星系である。1個艦隊や2個艦隊ならともかく、連邦軍の艦隊集団が相手となると、勝算は限りなく低い。

さりとて、フェルステル自治恒星系を見捨てれば、自治恒星系群はバートランド自治恒星系を見限り、連邦が、さもなくば連合王国に下るだろう。当然、バートランド自治恒星系自身、中立を保てなくなる。

食料の確保も問題だ。バートランド自治恒星系は必要な食料のほとんどを、フェルステル自治恒星系に頼っているため、早くも食料品の価格高騰の兆しが見られた。

ボーフォート元帥はビリエル・ロビン・セーデン大将を呼んだ。

しばらくするとセーデン大将は執務室にやってきた。彼は兵站幕僚長だが、ボーフォート元帥が信頼し政治、軍事を問わず、懸案について相談できる人物だ。

「何かありましたか？」

「いや、フェルステルのことで、君の意見を聞きたくてな」

果たして、救援艦隊を派遣すべきだろうか。ボーフォート元帥は率直に聞いた。

セデーン大將は応接セットのソファ―に腰掛け、腕を組みながら瞑目する。いつもの思考スタイルだ。瞼の裏では、各国の動きがシミュレーションされていくのだ。

「……手詰まりですね」

「やはり、無理か」

ここでフェルステル自治恒星系を見捨てれば、他の自治恒星系は被害を避けるために、連邦か連合王国に無血降伏するだろう。

しかし救援を送ったところで、勝てる見込みはなく、フェルステル自治恒星系陥落後、連邦軍はこの地域の重要拠点であり、すでに交戦状態にあるバートランド自治恒星系を指すだろう。

どちらにしろ、中立、すなわち独立を保てなくなる。

「連合王国」

セデーン大將が言う。

「連合王国の派遣した艦隊をうまく活用すれば、勝てるでしょう」
セデーン大將は自らの策を述べる。

それを聞き、ボーフォート元帥は問う。

「しかし、できるか？」

「難しいですが、できないことはありません」

「だが、そのようなことをすれば、中立は保てまい」

「しかし独立は保てます。国是をかなぐり捨てることになりますが

……」

ボーフォート元帥はしばし考え、頷く。

「そうだな。よし、救援艦隊を派遣しよう」

第6話 バートランド（後書き）

バートランド自治恒星系の国家予算の32パーセントが国防費というのは、だいぶ無茶な設定に思えます。

セデーン大将の策については、作中でいずれ、となります。

それでは、ご意見感想お待ちしております。

第7話 救援艦隊

軍国バートランドとは言っても、所詮は自治恒星系に過ぎない。その軍備は、余裕がないというのが実情だ。

重戦艦2隻

軽戦艦4隻

航空母艦8隻

巡航艦18隻

駆逐艦32隻

工作艦8隻

補給艦8隻

ミサイル艇128隻

哨戒艇184隻

この数字だけ見れば、なかなかの物だ。単独の自治恒星系でこれだけの軍備を備えた国は、そうそうある物ではない。

だが、あくまで“自治恒星系で”である。

2隻の重戦艦は全長1928メートル、全幅386メートル、主砲は15インチカートリッジガスレーザー砲12門という数字の通り、実際には重戦艦と軽戦艦の中間のような艦で、近年、各国で取り入れられつつある双胴式でもない。

輸出用には双胴式重戦艦も建造しつついるが、バートランド国防軍は採用する気配はない。

何よりミサイル艦を持たず、旧式兵器と化した航空母艦を、未だに空間制圧火力の主力に据えている。

しかもこれらの艦艇の大半は、これから10年以内に相次いで退役する予定で、その代艦の調達費用をどう捻出するかというのも、大きな課題だった。

エンゲルブレクト・アンブロジウス・ヴァルレンクイスト中将は、

フェルステル救援艦隊を率いて、祖国を出撃した。

彼はセデーン大将の推薦で今回の役目を任されたが、正直な話、あまり乗り気ではない。

手持ちの戦力は、

重戦艦 1 隻

軽戦艦 2 隻

航空母艦 4 隻

巡航艦 9 隻

駆逐艦 16 隻

合計 32 隻と、1 個艦隊規模である。

世界的に重戦艦と駆逐艦のみ、軽戦艦と駆逐艦のみ、といったような単艦種編成が主流の現代において、珍しい複合種編成の艦隊だ。これは手持ちの艦を 2 分して、常に半分は動ける状態にするためである。

ヴァルレンクイスト中将の悩みはなんと言っても、重戦艦以上の旧式艦、航空母艦の扱いだ。

「役立たずを 4 隻も、どうしろと言うんだ？ これだからもっと早く、ミサイル艦を建造しろて言ったんだ」

ヴァルレンクイスト中将が愚痴を言うのも、無理のないことだ。

技術の進歩と共に艦隊の防空能力が高まると、航空機による襲撃は自殺と同義語となってしまうた。

攻撃機の完全無人化で人的損害はなくなったが、それでも問題は残った。航空母艦に搭載できる無人機は、200 機か、どれほど欲張ってもせいぜい 250 機である。それ以上は格納庫の都合上搭載できない。もちろん、巨大な航空母艦を建造すれば大量の航空機を搭載できるが、費用対効果を考えれば好ましいとは言えない。しかも艦載機は事実上使い捨てとなる。

ならばと考えられたのが、無人機よりコストが低く、また大量に搭載できるミサイルを使う方法である。

史上初のミサイル艦、グラシアナ共和国軍の『トヴィング』は航

空母艦の格納庫を改造した物なのだが、その発想が正しいことは「第2次バルタザール戦争」で証明された。

何より、大量にミサイルを搭載できることは、航空母艦本来の運用思想の「敵の対処能力を上回る量の攻撃手段を叩きつける」という、飽和攻撃の思想に適っている。

「第3次バルタザール戦争」で、グラシアナ共和国軍が32隻、IU（Interstar union）軍が48隻のミサイル艦を動員するに至り、各国は飽和攻撃の主力が航空母艦からミサイル艦に移ったことを、目の当たりにした。

参謀長カントン・ハビエル・ポンピドウ准将が、ヴァルレンクイスト中将をたしなめる。

「あまり、文句を言わないで下さい。士気が下がります」

「ああ、すまん。これからは気をつけるが……」

たった868機でなにができる？ 言いかけたヴァルレンクイスト中将の機先を制し、ポンピドウ准将が言う。

「まあ、運用の工夫でカバーするしかないでしょう」

とは言っても、バートランド国防軍の持つ『イルマタル』級航空母艦の搭載機定数は、217機。4隻並べてもミサイル艦1隻の1斉射分にも満たない。しかもこの『イルマタル』級、輸出用に建造したはいがミサイル艦の出現で発注元がキャンセルし、行き場をなくした在庫品を、バートランド国防軍が格安で買い叩いたという代物だ。つまり、18年前の就役時点で、すでに旧式艦だったのだ。事前情報では、連邦軍の艦隊集団には、4000発以上のミサイルを抱えた艦が、16隻もいるのだ。これでどう立ち向かえと言うのか。

しかし、どれだけ戦力が乏しくとも、他にないのだから仕方がない。文句を言っただけ物があるのなら、人類は戦争をしてまで領土や資源を奪い合ったりはしない。

命令である以上、軍人として任務を遂行しなくてはならない。ヴ

アルレンクイスト中将もちろん、戦力の増強を要請した。だが、本国をから空きにはできないし、長距離航行能力がない、つまり特殊航法をできないミサイル艇や哨戒艇は連れていけないし、そもそも戦力として期待できない。つまり、答えはNOだ。

それでも、バートランド国防軍からすれば、精一杯の戦力を与えているから、ヴァルレンクイスト中将も強くは言えない。

ヴァルレンクイスト中将が率いるフェルステル救援艦隊は、普段、バートランド国防第2戦闘団の名で呼ばれている。

他国では一般に艦隊と呼ばれる戦闘単位だが、バートランド自治恒星系では、戦闘団という呼び名が一般的である。呼び名が違っただけで別に、他国の艦隊と大きな違いがあるわけではない。

第1戦闘団と第2戦闘団が軍艦で構成され、第3戦闘団以降が軍用艦で構成されている。

バートランド国防軍が保有する軍艦の半数を与えられているのだ。

第2戦闘団は4隻の補給艦を伴い、根拠地の惑星ヒエロニウムス栈橋を出撃した。

第7話 救援艦隊（後書き）

ミサイル艦とは何ぞや？ と思われていた方もいらしたと思います
が、ようするに武器庫艦らしき物です。

あくまで“らしき物”ですが。

バートランド自治恒星系が国家予算の32パーセントを使っている
わりに、戦力が乏しく思えるのは、まず、そもそも自治恒星系の経
済規模が小さいこと（それでもバートランド自治恒星系はまだ経済
規模が比較的大きい）、そしていずれ触れますが、宇宙艦の維持に
莫大なコストがかかるためです。

それでは例によって、ご意見ご感想お待ちしております。

第8話 接敵

連邦軍第1艦隊集団総旗艦『ヴィンチェンツォ・スカンディアーニ』には、2つの司令部が同居している。第1艦隊集団司令部と、第011艦隊司令部である。

艦隊集団の旗艦専用艦を造ったかどうかという意見もあったが、非常設の部隊のためだけに、艦隊集団指揮機能を持つ艦を建造するのは、凄まじく無駄なことにも思える。国防省が連邦議会に意見書を提出した直後、軍による無駄遣いの象徴として、与野党の見事な十字砲火によって撃沈されてしまった。連邦、連合王国間で軍拡競争が過熱していた折り、彼らも有権者のご機嫌取りに必死だったのだ。

さらに追い打ちをかけるように、国家間平和維持会議が開催され、軍縮条約を締結させられた。司令部を丸腰にするわけにはいかない。しかし真面目な戦闘に必要と言われる、5インチガスレーザー砲を1門でも積みめば、それは軍艦だから制限の対象となる。

ために戦略指揮艦構想から14年。未だに艦隊集団総旗艦には、2つの司令部が同居する状態が続いている。

連邦軍においては高級士官食堂は、佐官以上が利用する施設である。艦の首脳部に司令部が2つも同居すると、非常に賑やかになる。20人以上の将官及び佐官が並ぶのだ。

准尉以下が使用する一般食堂と大尉以下が使用する士官食堂は、基本的にパネルで仕切られたただだが（なぜ個別にしないのかは不明）、高級士官食堂は独立している。

それなりの広さはあるが、この人数だとさすがに混雑する。当然、談笑の声も普段より多くなるから、本当に賑やかだ。

特に一度戦闘が始まれば、栄養剤やチューブの味気ない食事しか採れないので、だれもがよく味わって食べる。普段なら10分ほど

で済ませなくてはならないが、戦闘前日だけは食事時間に制限を付けるような、無粋なことはしないのが、暗黙のルールだ。時間に余裕があるので、自然、会話が多くなる。

「これでしたら、真面目な食事とはお別れですね」

「これが最後の晩餐にならないことを祈るよ」

「そんな縁起でもない」

「フェルステルなんてひと捻りですよ」

「バートランドは援軍を送ったんだろ？」

「せいぜい1個艦隊でしょう。それより王立軍が動き出したと、本国から言ってきましたが」

「ああ、方面艦隊を編成したらいいな。自治恒星系群に介入する気だな」

「鉢合わせなければいいがな」

「連中は専守防衛だろう？　そう簡単に戦うまいよ」

「フェルステルの一角に食い込めば、こちらのものですよ」

「王立軍と交戦するとしても、その頃には後続の艦隊集団も合流しているさ」

参謀や高級副官の雑談を聞く限り、大半は戦況を楽観視している。雑談を聞くハンゼン大将自身、次の戦いで負ける気はしない。負ける要素が見つからない。

第1艦隊集団は、楽観論に傾いていた。

第1艦隊集団の前衛を務める第015艦隊では、すでに食事を終え、臨戦態勢を整えていた。

巡航艦、駆逐艦各16隻で編成されたこの艦隊は、偵察警戒を主任務とする、快速部隊である。その役目上、真っ先に戦闘に突入し、本隊の戦闘参加まで接触を保ち続ける必要がある。

食事終了後、全員が戦闘服に着替え、各々の持ち場についた。

連邦軍の戦闘服は、派手だ。装飾の類はもちろん存在しないが、大昔のSFアニメに出てくるような、白を基調としたいいわゆる機能

美に満ちた服装である。

派手なものには、主に2つの理由がある。まず、戦闘や艦外作業中に投げ出された人員の、視認性を高めるためだ。視認性が高ければ回収率も上がり、ひいては生存率の向上につながる。

そしてもうひとつの重要な理由が、広報活動である。すでに徴兵制が旧時代の遺物になっている現在、連邦軍に限らず多くの軍は、人員確保に躍起になっている。連邦軍は完全志願制であり、いかに質の高い将兵を多く確保するかが、切実な問題だ。多くの志願者を募るには、やはり格好いい方が有利だろう。

戦闘服は体に密着している。生地その物が体を締め付け、真空中で身体が破裂するのを防いでいるのだ。

この方式は当初、ボデイラインがはつきり分かるというので、女性陣を中心に不満なあったが、実際には生命維持装置や、外に出た時にスペースダストから身を守るプロテクターを付けると、言うほどボデイラインラインは目立たないので、その手の批判はなくなった。むしろ今では、密着した生地が皮膚呼吸の妨げになり、肌荒れの原因になるとかで不満が出ている。

頭にはヘッド・マウント・ディスプレイを内蔵した、フルフェイスのヘルメットを被る。戦闘服を着用した者は、表情が分からない。これはグラスヴァイザーヘルメット方式を採用しているためで、カメラを通してヘルメットの内側にある液晶パネルに、外の様子や必要な情報を映し出すためである。これもスペースダスト対策である。

第015艦隊司令アイザック・ピーター・リーコット少将は、このヘルメットを被るのが嫌いだった。なんと言っても息苦しい。中の空気量は適正だが、気分的には息苦しい。もちろん、だからと言って被らないわけにはいかないが、しかし目の前に液晶パネルが存在するのは、圧迫感を感じさせる。密閉され、閉塞感がある艦橋で、さらにグラスヴァイザーヘルメットを被ると、圧迫感の2乗だ。

液晶パネルが近いと視点が合わずばやけて見えるので、ピントを調節してやる必要がある。

リーコット少将がピント調節を終えた時だった。

「前方、距離300、アンノウンです」

宇宙での戦闘では、100キロが1単位である。300は、3万キロをしめす。

「赤外線走査を」

互いにフェルステル恒星系の中心に対し、標準秒速100キロ程度で相対しているため、相対速度は秒速200キロ。距離が縮まるが、まだ視認できる距離ではない。

約0.2秒後、赤外線によって敵影が露になる。そこから1秒ほどかけ、解析する。

「フェルステル国防軍所属『フォルトウナート』級工作艦のようです。確度98.45パーセント」

オペレーターの声と共に目の前の液晶パネルに、『フォルトウナート』級工作艦の情報が、映し出された。この艦は、全長2683メートル、全幅1192メートルの大型艦で、現在ネームシップの『フォルトウナート』以下、3隻が就役している。はっきり言って、フェルステル国防軍の規模に比べれば、不釣り合いな設備を備えた艦である。

「なぜ工作艦が、しかも単艦で？」

リーコット少将の疑問は、艦橋にいる全員の共通の疑問だった。

第8話 接敵（後書き）

連邦軍の軍艦で一般食堂と士官食堂がパネルで仕切つてあるだけなのは、理由は不明ですが、連邦軍内ではいくつか説があります。

曰わく、「軍艦の建造費用を圧縮するための手抜き工事。工程も少なくてできるので、早くて安上がりになる」

曰わく、「パネルを備品として購入する際に、実際より多く予算を請求して差額分をプール金にするため」等々です。

戦闘服が派手な理由は私が昔から「なぜSFアニメの軍隊の制服は派手で格好いいのか？」という疑問を持っていました。

それで私が勝手に出した結論が、宇宙での視認性向上と広報でした。

グラスヴァイザーヘルメット方式は、妄想の産物です。

目の前に液晶パネルがあると眼に悪そうです。

それではご意見ご感想お待ちしておりますので、ご遠慮なくどうぞ。

第9話 交戦開始

工作艦『エスペラント』艦長バルドウィノ・メンヘ・ニーニヨ大佐は、内心、悪態をついていた。

まず、イサカ中將に対し、なぜ工作艦が哨戒活動をしなくてはならないのか。もちろん、理由は分かっている。分かっているがこの作戦、納得できない。

そして連邦軍に向け、なぜ自分が担当している地域へ進出してきたのか。

『フォルトナート』級工作艦のドックは、広い。フェルステル国防軍は保有していないはずの、重戦艦の整備や復旧作業すらできるほどの広さと、充実した設備を持っている。

ニーニヨ大佐は決断を下し、イサカ中將からの指示を実行すべく、そのドックに通信をつないだ。

「ビオ中尉、敵は高速部隊だ。残念だがこの艦では逃げ切れない。済まないが、行けるか？」

シモン・ジャック・クリストフ・ビオ中尉が答える。

「敵の総旗艦ではないのが残念ですが仕方ないでしょう。犬死にするよりはマシです。行きます」

「分かった。健闘を祈る」

『エスペラント』のドック内には、『PT17』級哨戒艇のうち『214号艇』『215号艇』の2隻が繋留されていた。2隻はともに第3国境要塞の所属艇だ。

『214号艇』艇長ユーリー・ヴァティモヴィチ・ルミヤンツェフ大尉が、指示を出す。

「『214号艇』は射出準備に入る。全員着席の上、待機せよ」

アナウンスを聞き、小型の哨戒艇には不釣り合いな人数の将兵が、急拵えの座席に座り、身体を固定する。

直後、ドックの気密扉が解放され、漆黒の宇宙が姿を見せる。

繫留用の磁気固定装置が外される。

「『214号』、射出準備よし。これより敵旗艦に強行接舷の上、白兵戦を仕掛ける！」

「『214号艇』射出」

『エスペラント』艦橋からの指示、まず『214号艇』が宇宙空間に飛び出す。正確には飛び出したように見える。『エスペラント』が逆進をかけ減速したため、『214号艇』が慣性で外に飛び出しただけだ。

『215号艇』が続く。

慣性で進む哨戒艇は、フェルステル恒星系の中心に対し相対速度秒速100キロ。連邦軍艦隊もまた、フェルステル恒星系の中心に対し、相対速度秒速100キロで進んでいる。つまり連邦軍艦隊は、相対的に秒速200キロで哨戒艇に突っ込んでくることになる。

現在の彼我の距離は約2万5000キロ、このまま進めば125秒で激突である。

当然だが、哨戒艇の目的は強行接舷であり、激突ではない。そのためには、双方の相対速度を0にしなければならない。2隻に求められる加速度は、秒速・100キロ毎分。

「敵工作艦、小型艇を射出しました。『PT17』級哨戒艇の可能性大」

ヘッド・マウント・ディスプレイに、情報が表示される。『PT17』級の可能性は98.79パーセント。

報告の直後、リーコット少将のもとに、CICからの連絡があった。第015艦隊旗艦『エンタープライズ』艦長シリル・ファビア
ン・コクトー大佐からだ。

「迎撃します」

コクトー大佐は短く言う。

「了解した。発砲を許可する」

『エンタープライズ』のCICでは、コクトー大佐が三次元戦術状況標示盤を見つめていた。

彼女は命じる。

「主砲、撃ち方用意。目標、敵『PT17』級哨戒艇」

8インチカートリッジガスレーザー砲が、C02、C03と割り振られた目標を指向する。

彼我の距離は約2万キロ。いくら相手が全長200メートル余りの小型艇だろうと、必中距離と言っている。

「撃ち方用意、完了。目標C02及びC03を捕捉」

「撃ち方始め」

コクトー大佐が命じる。

「撃ち方始め」

射手が復唱し、発射スイッチを押す。

その瞬間、砲塔では撃針が、砲尾のMHD発電機に装填されていた薬莢の底部を、叩いた。

薬莢の内部で、即燃性発射薬が、爆轟を起こす。薬莢内の火薬は発射薬と言いつつもその実、爆薬なのだ。

発射薬と共に薬莢内に封入してあったアルゴンガスが、その爆轟の熱と圧力でプラズマ化し、そしてプラズマの動きに反応したMHD発電機が作動する。

それによって得られた電力は、水冷式放電管に充填されて媒質の二酸化炭素の中を往復し、増幅される。その後、ダイヤモンド製のレンズと窓を通し、砲塔から撃ち出される。

一連の動作の後、艦首側4門の8インチカートリッジガスレーザー砲が、砲声と共に攻撃を開始する。

砲声は艦体構造体と艦内の空気を通じ、コクトー大佐の耳殻にも響く。彼女が実戦でこの砲声を聞くのは、これが初めてだ。

別段おかしいことではない。連邦軍が最後に実戦を経験したのは、

20年前の「第3次バルタザール戦争」に、グラシアナ共和国を支援して介入した時なのだ。コクトー大佐はその頃は士官学校にいた。そして、連邦軍の戦史記録の最先端に行く第015艦隊のクルーは、コクトー大佐に限らず全員が初陣だ。

砲声は訓練のそれと変わらないが、実戦の緊張感と初陣の高揚感から、全く異質に感じられる。

弾着は約0・058秒後。2隻の哨戒艇が撃沈判定を受け、CICの三次元戦術状況標示盤から消滅したのは、発射から約0・117秒後のことだった。

『エンタープライズ』艦橋では、撃沈判定を確認し、リーコット少将が命令を発した。

「これより第015艦隊は敵C01目標の追撃を行う。イマジナリー通信回線開け。通信内容『発、第015艦隊司令、宛、第1艦隊集団司令部。ワレ敵艦隊と接触。哨戒艇2隻を撃沈せり。爾後、追撃を敢行し残敵掃討にかかる。本隊はワレを追及されたし』以上、送信せよ」

通信を終えると、第015艦隊は増速し、工作艦『エスペラント』の追撃を開始した。

第9話 交戦開始（後書き）

カートリッジガスレーザー砲は作中にあるとおり、薬莖の火薬を使いエネルギーを得て発射する形式です。

名前だけ出てきたターボガスレーザー砲は、カートリッジガスレーザー砲とはエネルギーを得る方法が違っただけで、基本的に同じ炭酸ガスレーザーです。

それとこの回からジャンルを【戦記】から【SF】に変更しました。これからもよろしく願います。

それではご意見、ご感想、またご質問もお待ちしています。
遠慮せずにお寄せ下さい。

第10話 要塞陥落と密約

司令官公室のイサカ中将のもとに、『エスペラント』からの通信が伝達された。

「『エスペラント』より通信です。『ワレ敵艦隊の追撃を受く。これより反撃を敢行す』以上。爾後、通信全く途絶しました」

『エスペラント』からの敵艦隊発見の報告が、約10分前である。伝えられた陣容は巡航艦16隻、駆逐艦16隻だった。工作艦1隻では何もできまい。反撃といっても、『フォルトゥナート』級工作艦の武装は、20ミリターボガスレーザー砲4門なのだ。艦隊を相手にしても、一方的になぶり殺しにされるだろう。『エスペラント』の帰還は絶望視していい。

哨戒艇を用いての強行接舷と、白兵戦による指揮系統破壊は、失敗したのだろう。

イサカ中将は作戦室に向かい、レッフラー少将と今後の作戦について確認を行った。

「やはり、あの程度の奇策では勝てんな」

開口一番、イサカ中将は言った。その口ぶりは失敗することを予期していたようだ。

イサカ中将は奇手奇策の類いは嫌いだった。戦術とは常道の積み重ねだ。常道から逸れたことをすれば、現場が混乱するだけである。そもそも戦術で奇策を用いるということは、裏を返せば奇策を用いなければ勝てないということである。奇策が現場を混乱させる以上、常道で勝てる時に、奇策を用いてリスクを高める必要性など存在しない。奇策の存在自体が、すでに戦略的な敗北を示している。

そして相手が人間であり、学習する以上、奇策は2度とは通用しない。仮に奇策を用いるべきとしても、それは本来、この戦いに勝てば全てが決するという、決定的戦闘において使用するべきでなく

てはならない。

しかるに現在、イサカ中将、レッフラ少将麾下の部隊は、奇策を以てしても逆転勝利は不可能な状況にある。

この状況は戦略的敗北云々ではない。圧倒的な国力差に起因する。国家の発展のし方が根本にある、いわば「歴史的敗北」なのだ。こうなった以上、ある意味フェルステル自治恒星系の解体は、歴史の必然とも言える。

「もともと、時間を稼げれば儲けものでした。すでに2隻にはミサイル艇及び哨戒艇の収容を完了しています。第3根拠地艦隊の脱出準備は整っています」

これは総参謀部からの指示だった。長距離航行能力を持たない第3根拠地艦隊を、工作艦に収容し後方に転進させるために、工作艦『フォルトゥナート』『ヴィナンツイオ・ロツジェロ』を差し向けた。

第3国境要塞は、時間稼ぎのための捨て石だ。決戦場に想定した第4惑星トローヤ衛星軌道上に、戦力を集結させるための、犠牲部隊に過ぎない。

ミサイル艇12隻を、その犠牲部隊と心中させる余裕など、フェルステル国防軍にはあるわけがない。

レッフラ少将以下560名の将兵と32隻のミサイル艇、哨戒艇は、開戦前からすでに根拠地の放棄と後方への転進が決定していたのだ。

「それでは、30分後には後退を開始してくれ。その後、港は封鎖する」

「分かりました。健闘を祈ります」

レッフラ少将は作戦室を後にし、30分後、第3根拠地艦隊は転進を開始した。

第1艦隊集団は、距離400から砲撃を開始した。これに第3国境要塞の、10インチカートリッジガスレーザー砲と、5インチカ

ートリッジガスレーザー砲が反撃する。

しかし10インチガスレーザー砲程度の出力では、戦艦級の装甲を破るのは、非常に困難だった。ましてや5インチガスレーザー砲では、駆逐艦程度の相手が精一杯であるが、しかし第1艦隊集団はセオリー通りに、重装甲の戦艦級艦艇を先頭に押し立て、砲座を制圧していくため、有効な反撃はできない。

火力の差は如何ともし難く、交戦から10分とかからず全ての砲座が沈黙した。

各艦に所属する陸戦隊が取り付き、内部に籠城する第3国境要塞守備隊を、掃討していく。

むしろこれに手間取り、最大直径137・4キロの岩石の内部を完全制圧するのに、2日間を要した。

連邦軍の損害は軽戦艦、巡航艦各1隻が小破したに止まった。他、陸戦隊17名が戦死、26名が負傷だった。

第3国境要塞が、第1艦隊集団に与えた物質的な損害は少ないが、2日間という時間は大きく、国防艦隊以下、各艦隊の可動艦、そしてバートランド国防軍第2戦闘団が惑星トローヤ衛星軌道上の第2軌道要塞に、集結を完了したのだ。

そして、それ以上に今後の戦局に大きな影響を与える動きが、連合王国首都で起きていた。

フェルステル自治恒星系の在連合王国大使ラインホルト・ツェベライは、バートランド大使館の1室にいた。

同じ部屋にはこの大使館の主、バートランド自治恒星系のバーンハート・ブラッド・ベヴァン在連合王国大使と、連合王国を束ねるアースキン首相がいた。

2人の大使はそれぞれ、イシャエワ臨時大統領兼任首相とポーフォート元帥の全権委任状を携えていた。

アースキン首相からすれば、イシャエワ臨時大統領兼任首相の権限について、法的な根拠や民意が存在しないので、ツェベライ大使

の持つ全権委任状には、信頼が置けなかった。フェルステル自治恒星系本国の政情如何によつては、瞬時に紙屑と化するのだ。

しかし、他に交渉相手がいないのも事実だ。たとえ信頼できずとも、アースキン首相には交渉相手を選ぶことはできない。

「つまりボーフォート元帥閣下は、バートランド国防軍とフェルステル国防軍が連邦軍を抑え、王立軍と挟撃したいと？」

アースキン首相の質問に、ベヴァン大使が答える。

「端的に言えば、そうなります」

「すでに我が国防軍とバートランド国防軍は、艦隊決戦に向け、集結しています」

とツエベライ大使。

「そして、艦隊決戦に勝てば……」

「勝てば、あとは我々がまとめます」

ツエベライ大使とベヴァン大使が言う。

「分かりました。それではその方向で」

3人は書類に署名し、手交した。

第10話 要塞陥落と密約（後書き）

いよいよ連邦軍第1艦隊集団とフェルステル国防軍との、本格的な戦いが始まったわけですが……、なんだか盛り上がりませんね。

作中でイサカ中將が奇策を批判したのは、単に私が奇策嫌いだからです。

それではご意見、ご感想お待ちしております。

第11話 王立軍接近

連邦軍第1艦隊集団が工作艦のドックで、損傷艦の修理をしている間、王立軍リユーディア方面艦隊は、フェルステル自治恒星系に集結しつつあった。

3方面から主戦場となる惑星トロージャを、包囲する形である。

バーナード・ブラントン・チエスタートン少将は、重戦艦16隻、駆逐艦16隻を率い、インナー・エリア方面から惑星トロージャに向かった。BF-133である。

チエスタートン少将の座乗する旗艦『ジルベルシュトライフエン』は、17インチカートリッジガスレーザ砲14門を備える、『ジルベルシュトライフエン』級重戦艦1番艦である。標準秒速300キロでの加速度は、毎秒94キロ。

『ジルベルシュトライフエン』級はその重装備からも分かるが、国家間平和維持会議以前の、主砲口径に制限がなかった時代に計画された艦である。当初、連邦軍の次世代重戦艦に対抗すべく、大量の建造が予定された。その数96隻。しかし国家間平和維持会議の影響で就役したのは16隻、つまりBF-133の所属艦のみだ。

17インチカートリッジガスレーザ砲14門という火力は、現在フェルステル自治恒星系に展開する艦艇の中では、最強の部類に入る。リユーディア方面艦隊総旗艦『デヴィジオーン』が属する、『マンタ』級重戦艦も、16インチカートリッジガスレーザ砲14門なのだ。

これは、『ジルベルシュトライフエン』級重戦艦がもともと、その重火力と重装甲で味方の盾となりつつ、敵艦隊の陣形に突破口をこじ開けるという運用思想で、建造されたがための重装備である。

ドゥーニ大將が『ジルベルシュトライフエン』を総旗艦に選ばず、『マンタ』級重戦艦を装備したBF-142に身を寄せたのも、その運用思想が理由だ。まさか総旗艦を敵陣に呐喊させるわけにはい

かない。であるから、そもそも1個方面艦隊を指揮できるほどの通信設備が、『ジルベルシュトライフェン』級重戦艦には揃っていないのだ。

B F - 133はいわば、他の巡航艦基幹の艦隊と同様、切り込み部隊なのだ。

全員がすでに戦闘服に身を包み、臨戦態勢にあった。

艦橋とCICにある三次元戦術状況標示盤は、すでに起動し、フェルステル自治恒星系を映し出している。三次元戦術状況標示盤は、部隊が立体的に展開する宇宙空間での戦いには、欠かせない設備だ。アクリル製の円柱内部に満たされたガスをスクリーンにして、立体映像を映し出すわけだ。

だがそこには連邦軍を示す表示がない。観測結果から大まかな位置は予測できるが、参考程度にしかない。リアルタイムの正確な位置情報を知るには、もっと近づく必要があり、現状の不正確な情報を載せるわけにはいかない。

「連邦軍は、恐らく第2軌道要塞に向かっていているな」

チエスタートン少将は、そう予想する。

参謀長レオポルト・リーバマン准将が、理由を聞く。

「なぜそう思いますか？ これまでと同じく、迂回して首都を目指すのでは？」

連邦軍は第1、第2国境要塞、そして第5惑星レーセの第3軌道要塞を、無視して素通りしている。

「連邦軍が無視した要塞と、第2軌道要塞の大きな違いはなんだ？」
リーバマン准将は即答した。

「艦隊の有無ですか？」

連邦軍が無視した要塞には、数隻の哨戒艇がいるだけで、艦隊機動戦はできない。一方、第2軌道要塞には、フェルステル国防軍の主力と、バートランド国防軍第2戦闘団が集結している。

「そうだ、要塞に艦隊を残すと、仮に迂回して首都を目指しても背後から追撃を受ける形になる。そんなリスクを負うよりは、初めか

ら正面きつて艦隊ごと要塞を攻撃する方が、かえって少ない損害で切り抜けられる」

「そして、第2軌道要塞で国防軍主力を撃滅し、降伏を迫る、と？」
「まあ、そうなるな」

リューディア方面艦隊司令部も、チェスタートン少将と同じ見解だった。

であるからリューディア方面艦隊は、第2軌道要塞で集結するうちに、弧を描き進撃されている。

前方に第2軌道要塞とフェルステル国防軍及びバートランド国防軍、後方から覆い被さるようにリューディア方面艦隊。第1艦隊集団は、すでに包囲されているのだ。

包囲隊形で背後から攻撃するのだから、リューディア方面艦隊が優位にあるのは明らかだった。

しかも正面にはフェルステル国防軍、バートランド国防軍が待ち構えている。フェルステル国防軍の第2軌道要塞は、大きな火力を持っている。バートランド国防軍には重戦艦もいる。

ドゥー二大將は自軍の勝利を確信していた。

『ヘルメス・トリスメギストス』以下軽戦艦16隻、駆逐艦16隻からなるBF-100を率いるアイキオ中將は、内心穏やかではない。

連邦と連合王国は、互いに宣戦を布告しておらず、正式には戦争状態にない。にも拘わらずドゥー二大將は、端から戦端を開くつもりで兵を進めているのではないかと、疑いたくなる命令を発していた。

ドゥー二大將は普段、決して好戦的というわけではない。それが、派閥争いが絡むと勝手に戦端を開きかねないのだから、恐ろしい。アイキオ中將自身も、派閥争いとは無縁ではない。むしろ、将官まで出世するには派閥争いに参加する必要があると言っても、過言

ではない。

今回の派閥争い、つまり外征派と防衛派の主導権争いに加わらなかったのは、本来、国防方針とは政治家が考えることであり、軍人は手段に過ぎないという、アイキオ中將の持論による。

一歩間違えれば、自らも開戦者となり得る。それは恐ろしいことだ。

アイキオ中將が物思いに耽っていると、

「司令、そろそろどうでしょう？」

イバルリ准將が声をかけた。

アイキオ中將は時間と宙域図を確認して、応える。

「そうだな、そろそろか」

現在、BF-100は全艦が一直線に並び、単縦陣で進んでいる。最も機動力が高い陣形だ。

しかし単縦陣は全長が9万3064キロに及び、このままでは戦闘は困難だ。

「艦隊、第3接敵序列に移行」

リューディア方面艦隊司令部からの事前の命令に従い、アイキオ中將は命令した。

王立軍では、第1接敵序列が単縦陣、第2接敵序列が単横陣、第3接敵序列が球形陣と呼ばれている。

そして普通、戦闘は第3接敵序列で行われる。

つまり、BF-100は戦闘隊形へと移行したのだ。

第11話 王立軍接近（後書き）

どうも、最近は執筆意欲ナッシングで遅くなりました。

おまけに昨日はようやく書くこうと思ったら、無性にプラネタリウムに行きたくなったりで。

結局途中で投げ出し、平日の昼間からプラネタリウムへGO、その足でついでに天文台にも登っちゃいました（昼間からでは見られる星は相当明るいのに限られているし、それすらも曇っていたため見られなかった）。

今度は夜に行こうと思ってたりします。

今の時期は木星が見頃ですね。

ただ、少し前（5月だったかな？）から木星の南赤道縞が消えてしまっている、今は普段とは少し見た目が違うのですが。

12月にはいろいろなイベントもあります。

7日には探査機『あかつき』がいよいよ金星に到達しますし、中旬には双子座流星群もあり、21日には皆既月食ですよ。

楽しみだなあ。

と、前口上が長くなりましたが、今回から見て分かる通り、本作品のタイトルが『穹界の剣』に変わりました。

以前にはジャンルの変更もありましたが、この小説は予想外に迷走しています。

最近の政治用語では「ブレている」と表現される状況です（↑ここ笑いどころ）

そんな状況ですが、これからもよろしくお願いします。

それではご意見ご感想お待ちしております。

第12話 会戦直前

2日で損傷艦の復旧を終え、第1艦隊集団は進撃を再開した。

その間、王立軍の背後からの接近は、第1艦隊集団からも観測されている。どれだけ欺瞞技術が発達しても、全てを隠しすることは不可能だ。

「これは、少々まずいのでは？」

セーニ少将が、観測結果を見ながら言う。

「前後に敵か、どうするかな」

ハンゼン大將は腕を組み、考える。

「推進剤の残量は、どのくらいかな？」

高級副官のうち、サムエル・パートリク・ヴィクルント中佐が答える。

「概数ですが、報告では各艦隊、駆逐艦で5600トンから6000トン、主力艦は1万3000トンから2万トンは」

「補給艦は？」

「ヴァレニウス中佐の報告では、補給4回分です」

ハンゼン大將は素早く計算した。

「そうか、十分な量だな。よし、王立軍が合同すると面倒だ、その前にフェルステルと一気に決着をつけよう」

直後、『ヴァウドラ』に増速命令があちた。現在の第1艦隊集団は、フェルステル恒星系の中心に対し、相対速度秒速250キロである。

それを、一拳に相対速度秒速360キロまで加速させるとのことだ。

秒速110キロの増速には、『レアル・アドミラル・イエスタンツイウ・セバステイアン』級の場合、現在連邦軍が使用する推進剤で、1・2秒ほどの燃焼時間が必要になる。

しかし、実際には恒星フェルステルの引力を利用できるので、加速にはそれほど時間も推進剤もかからない。機動力では内から外へ向かうより、外から内へ向かう方が有利だ。

「接敵が早まりますが」

作戦参謀ヴァルブルカ・ブリュンヒルト・メーベ大佐が、宙域図を見ながら言う。

「遅れるよりはいいだろうな」

ジョチキン准将が応えた。

フォシユマン少将も同意する。

「そうだ、早く着けばそれだけ敵が対応する余裕はなくなるし、我が軍の将兵の疲労も少なく、戦闘力を保持しやすい」

艦隊はすでに特殊航法から通常航法に移っており、第2軌道要塞まで4320万キロの地点まで肉薄している。

会敵は48時間後の予定だったが、増速により33時間20分後に繰り上げとなった。

第2軌道要塞には、フルマンティ中将以下フェルステル国防軍の主力と、バートランド第2戦闘団が集結していた。

重戦艦1隻

軽戦艦3隻

航空母艦4隻

巡航艦10隻

駆逐艦20隻

ミサイル艇48隻

哨戒艇86隻

工作艦10隻

補給艦11隻

合計193隻、それに航空母艦の艦載機が868機。

本来フェルステル国防艦隊は軽戦艦1隻、巡航艦3隻、駆逐艦8隻を保有していたが、このうち現在戦力発揮可能性なのは軽戦艦1

隻、巡航艦1隻、駆逐艦4隻である。

これは、艦隊の整備のためだ。宇宙で使用される艦艇は恒星からの直射日光、スペースダスト、デブリ、日向と日陰の極端な温度差など、様々な要因によりただ浮いているだけでも、痛んでしまう。平時は常に一部の艦艇は船渠で補修を受けており、全力を発揮できないものだ。

艦艇はただ建造すればいいわけではなく、この定期的な補修によって、莫大な維持費が必要となる。経済力の弱い自治恒星系では、大規模な戦力を保有できない、理由のひとつだ。

フェルステル自治恒星系にとって現状はむしろ、定期的に『ノルトリヒト』が戦列にあつたことが、幸いと言えた。連邦軍の侵攻があと1カ月早かったら、『ノルトリヒト』は定期補修で動けなかったのだ。

フルマンティ中将与ヴァルレンクイスト中將は、第2軌道要塞で接見した。

「抗戦準備は整いましたな」

フルマンティ中將の言葉に、ヴァルレンクイスト中將も応じる。

「ああ、あとは王立軍がくるまで持ちこたえられるか、が問題だが

……」

「この要塞には十分な火力がある。艦隊機動戦では真面にやっても敵わない。しかし、籠城すれば十分な時間は稼げるはずです」

「たしかに、この要塞砲は異常だな」

「威力はよく御存知でしょう？」

「いや、我が軍では使ったことはないからな、データとしてしか知らないな」

2人が会話をしていると、いよいよ接敵の報告が入った。

「敵艦隊の接近を確認、距離29万9640キロ。減速しつつなおも接近中です」

「分かった、艦隊を全力出撃させる」

フルマンティ中將はヴァルレンクイスト中將に向き直る。

「そういうことです。出撃準備をよろしいですか？」

「分かった。ここの最高指揮官は君だ、命令には従う。行くとしよう」

ヴァルレンクイスト中將がモノレールに乗ると、続いてフルマンティ中將も乗り込んだ。

「私も『ノルトリヒト』で指揮を執るので」

「指揮官先頭かな？」

「その方が士気も上がりますし、国民の私に対する印象もよくなるのでね」

「君は政治家か？」

「私にも野心はある。ましてや今の我が国を情勢を考えれば、乗じない法はないでしょう」

なるほど、とヴァルレンクイスト中將は思う。フルマンティ中將は勝利を得ることができたのなら、それを背景に政界に進出するつもりなのだ。指揮官先頭というのも、自身を救国の英雄に仕立て上げる演出なのだ。

「しかし政治屋になりたいとは、少し変わっているな」

「そうですね、人は普通、出世を望むと思いますが」

「いや、ボーフォート元帥の苦勞を考えると、自分には政治家など務まらないと思えてね」

話している間に、第2軌道要塞の棧橋に到着した。

「それでは、お互い生きてここに帰れることを祈ります」

「ああ、それじゃあ、あとでまた会おう」

2人は別れ、それぞれの旗艦に向かった。

第12話 会戦直前（後書き）

お久しぶりです。

今回は第7話の後書きで触れた、宇宙艦の維持に必要なコストについてですが、作中にあつた通り、宇宙空間の過酷な環境で痛んだ艦艇を補修すりために、維持費が嵩むわけです。

定期補修の期間は艦種にもよりますが、設定上は駆逐艦で半月程度、重戦艦になると3カ月ほどとなります。

それでは、ご意見ご感想をお待ちします。

第13話 568対16

「世の中に要塞ほど役に立たない軍備はない」という言葉がある。これは少々辛辣だ。本当に全く役に立たないのなら、とうの昔に要塞というカテゴリーは消滅しているだろう。

だが、使いどころがほとんどないのは事実だ。攻撃側に対し防御側が要塞に籠城するするのはどういう時かというと、防御側の戦力が圧倒的に小さく、機動戦で勝てないという場合が多い。

この場合、攻撃側はわざわざ時間と戦力を浪費してまで要塞を攻略せずとも、無視して迂回すれば済む。

防御側は打って出ても勝ち目がないのだから、黙って迂回を見過ごすしかなくなる。

要塞とは基本的に動けないのだから、いかに強大な火力を備えようと、相手が射程内に入ってくれなければ、無用の長物でしかない。例外としては、要塞が一本道の上にあり、攻撃側がそれを迂回できない場合だが、遮るものが何もない宇宙では、そのような状況はまずあり得ない。

あるのは、戦略上の要衝や緊要地形を守っている場合だろう。極端な例えをするなら、首都や工業地帯だ。

では他に、攻撃側が要塞を是が非でも攻略しなくてはならない場合といえば、何があるか。防御側が十分な機動戦力を要塞内に有している場合が上げられる。防御側は要塞の掩護下で優位に戦える。攻撃側は迂回しようと思えば、背後から襲撃を受けることになる。

第1艦隊集団のうち、第2軌道要塞に最初に到達したのは、例によって巡航艦編成の第015艦隊だった。

艦隊司令のリーコット少将は、目の前の三次元戦術状況表示盤を見る。

脅威度が低い支援艦艇を示す目標がやたらと多い。一目見て、

130以上あるだろうか。戦艦や巡航艦など主力艦を示すA目標や、駆逐艦を示すB目標と比べ、裕に3倍はを超える。

4分の3以上が支援艦艇という編成だ。

「砲戦用意」

リーコット少将は命じる。

134を数えるC目標が、先頭に立っている。主力艦や駆逐艦は後方だ。

向かってくるC目標のうち3分の2近くは哨戒艇だが、ミサイル艇がその中に紛れている。

「敵艦隊より航空機の射出を確認！ 430機以上！」

航空機を示すD目標が現れ、C目標と一緒にたになる。

「う……」

570近い反応に、リーコット少将は思わず呻いた。

敵味方の表示は568対16、戦力比は35.5対1だ。主力艦や駆逐艦を含むとさらに差が大きくなる。

「全艦後進だ！ 距離を取れ」

すぐに逆進シークエンスに入る。

「艦長、近接防御火器を用意した方がいいぞ」

絶対に、主砲だけでは間に合わない。

CICからコクトー大佐が応える。

「分かりました。ターボ・ガスレーザーとRMAを準備させましょう」

「あの程度の敵はミサイル艦のサルボがあれば一瞬で片が付くん
だが」

参謀長ユツシ・エディ・ホルムクヴィスト准将の言葉に、リーコット少将が応える。

「フォシユマン少将は後続だからな。なんとか第014艦隊の線まで引きつけるぞ」

第015艦隊は全艦が逆噴射をかけた。恒星系の重力と貫性を、推進剤を使って無理やり克服する力業だ。

哨戒艇『130号艇』に陣取るフィオレンティーノ・バルバーリ少将は、押し寄せる緊張感に固唾を呑んだ。

自身を含め哨戒艇は全て犠牲部隊だ。哨戒艇を盾にして、全てのミサイル艇と攻撃機が発射位置までたどり着ければ、964発の対艦ミサイルを放てる。

1個艦隊16隻を撃沈ないし大破せしめ、戦線離脱させれば、今後の戦いの難易度はだいぶ変わってくる。

残念なのは、相手が巡航艦主力の前衛艦隊ということである。どうせ相打ちなら、戦艦級の敵と差し違えたかった。

軽戦艦『ノルトリヒト』は、掩護射撃を開始した。

いや、『ノルトリヒト』だけではない。バートランド第2戦闘団ね重戦艦からフェルステル国防軍の無数の哨戒艇まで、砲を持つ全艦が砲撃を開始している。

ガスレーザーは光であり、理論上、口径に関わらず、ガスレーザー砲は無限大の彼方まで届く。

だが、実際には宇宙を漂う無数の塵や、他の光源から発せられる異なる波長の光、場合によってはガスが存在によって減退する。基本的に距離が離れるほど威力は減り、やがて消滅するのだ。

その有効射程は基本的に発射時の出力、つまりは口径の大きさに比例する。

とはいっても、交戦距離15万キロとなると、口径など関係なしに、問答無用で届く。

15万キロもあれば、ガスレーザー砲の命中精度は低い。

第015艦隊にとって、あとは各艦がまとう装甲が頼りだった。

第015艦隊所属艦の装甲は、スタンダードな多重装甲である。

ガスレーザー砲に最も有効な装甲は、鏡面装甲だ。金メッキで鏡面処理を施した装甲は、レーザーを跳ね返す。

だが、レーザーを跳ね返すということは、レーダー波をも跳ね返すということだ。不可視光線も電波も基本的に同じ光だから、当然だ。

それはステルス性の放棄であり、自身の位置を暴露しているに等しい。可視光線も跳ね返すから光学索敵でも、レーダーによる電子索敵でも、すぐに分かる。「逆立ちした老婆が時速100マイルで爆走するのと同じくらい目立つ」という、よく分からない例えもある。

そんな老婆は実在しないからなんとも言えないが、実際に剥き出しの鏡面装甲は目立つ。

これを防ぐのが通常装甲だ。

ASA (Anti spacedust armor) と呼ばれるそれは、艦艇の外殻でもある。

ASAの仕事は様々だ。

鏡面装甲がスペースダストやデブリで傷つかないように保護する。そしてステルス性を向上させる。

また、冷却装置としての役割もある。

ASAと鏡面装甲の間には、空間がある。ハニカム構造で細かく区切られたそこには、冷却ガスが充填され、恒星からの直射日光で艦体が焼けることと、熱で外板が膨張し歪むことを阻止している。

冷却装置としての働きは、赤外線走査に対するステルス性向上にも一役買っている。

冷却ガスにはASAを突破した敵弾を乱反射させ、減退させることで鏡面装甲の負担を減らす役割もある。

今のところ命中弾はほとんどない。命中弾も装甲がよく防いでいるが、出力の大きな大口径砲に狙われれば、特に駆逐艦などは大被害を受けることが分かりきっている。

第014艦隊の攻撃可能範囲までのあと1030万キロが、果てしなく遠く感じられた。

第13話 568対16（後書き）

お久しぶりです。

またしてもだいぶ遅れました。

すみません。

「逆立ちした老婆が時速100マイルで爆走するのと同じぐらい目立つ」という例えは、我ながら意味不明です。なんでこんなこと書いたんですかね？

次の更新もいつになるか分かりません。

まただいぶお待たせしてしまうと思います。

ご容赦ください。

ご意見ご感想お待ちしております。

第14話 艦隊対ミサイル

第014艦隊は第015艦隊の交戦を確認していた。

宇宙では、SSMは一度加速すれば慣性で飛んでいくから射程無限だが、それは机上の理論で、細かなダストにより誤爆する物が出てくる。

誤爆したミサイルの破片はさらに周囲のミサイルを誤爆させ、まるで核分裂のような様相を呈する。

リスクを回避するには当然、標的に近づいてミサイルの飛行行程を短くするのが確実だ。

「まったく、イサクは突出し過ぎだぞ」

フォシユマン少将は、第015艦隊の指揮を執る同僚に向け、呟いた。もちろん、聞こえはしないのだが。

「功を焦りましたか？」

「さて、敵を誘因してくればいいが、あまり被害が大きいと後々面倒だな」

撃沈判定を受けた艦艇もキールと乗員さえ無事なら、敵を撃退すれば回収して工作艦と合流し、戦力として復帰させることができる。だが、数が多いと復帰には時間がかかる。状況が切迫している今、即戦力は少しでも欲しいのだ。

第1艦隊集団司令部は、緊張の中にあつた。

「どうか、王立軍は」

「進撃を止めません。我々と一戦交える気でしよう」

『ヴィンチエンツォ・スカンディアーニ』艦橋、ハンゼン大将の問いにセー二少将が答えた。

「誰だ？ 『王立軍は専守防衛だ、向こうからは仕掛けてこない』とか言っていた奴は」

ハンゼン大将は言ったが、別段特定の人間を非難するつもりはな

かった。

ハンゼン大将自身、フェルステルの降伏か、形勢が決定的となるまで、王立軍は中立を維持するものと考えていた。

それでも、幕僚たちは戦々恐々だ。明らかな自分たちの失敗である。

「前衛はどうだ？」

「015艦隊はすでに交戦中。後続の014艦隊は前進しています、4時間で交戦状態に入ります」

「014艦隊と015艦隊の距離が開き過ぎているな」

「015艦隊は目下014艦隊との合流を目指しています」

「4時間は長いぞ」

「被害は最小限に抑えられています。この分なら大丈夫だと思いますが」

「楽観はできない」

ハンゼン大将は三次元戦術状況表示盤を睨み続けた。

敵は突撃機動を開始した。

三次元戦術状況表示盤に示されたC目標、それに追従するD目標が、急接近する。

すでに敵主力艦隊からの砲撃が命中することはない。艦隊の進行方向が変わり、また回避運動を開始したために、この長距離では当てようがないのだ。小型艇と攻撃機の迎撃に専念できる。迫りくるC目標の豆鉄砲など、大した脅威ではない。

各艦の主砲、さらに20ミリターボガスレーザー砲が待ち構える。カートリッジガスレーザー砲もターボガスレーザー砲も、同じガスレーザーだ。その違いは、必要なエネルギーを得る手段にある。

薬莢内のアルゴンガスをプラズマ化させ、MHD発電によった必要なエネルギーを得るカートリッジ式に対し、主に対空火器に使用されるターボ式はその名の通り、タービンを回すことで発電する。より正確には核融合で得られる艦内電力のうち、余剰分を使用する。

必然的に、1隻当たりの砲搭載量は、核融合炉の能力に大きく左右される。

ターボ式で大口徑砲が必要とするエネルギーを得るには、カートリッジ式よりも時間がかかる。しかし、低出力の小型砲や近接防御火器では逆に薬莖の装填時間の方が、核融合発電による充電より長くかかってしまうし、大量の弾薬を消耗するため、莫大なコストがかかってしまう。何よりカートリッジ式と違い、弾切れの心配がないのが、速射性能の高い小型火器にはありがたい。大口徑砲はカートリッジ式、小口径砲はターボ式という棲み分けが自然と成立した。カートリッジ式とターボ式の分水嶺となる口径は、一般に40ミリである。

「全艦全火器使用許可、各個の判断で攻撃開始せよ」

リーコット少将が命令すると、CICのコクトー大佐は間髪入れず号令した。

「主砲、撃ち方始め！」

8インチカートリッジガスレーザー砲が艦内に砲声を轟かせ、敵艦艇を貫く。

敵はそれでもなお、突撃を続ける。案の定、主砲だけでは間に合わない。

「近接防御火器、撃ち方始め！」

続いてコクトー大佐が出した命令で、連邦軍艦艇の標準近接防御火器である、20ミリターボガスレーザー砲が火を噴いた。

核融合炉で生み出された蒸気がタービンを回し、発生した電力が各砲座に分配される。

あとはカートリッジ式もターボ式も、違いなどない。水冷式放電管の二酸化炭素中を往復し、増幅された後ダイヤモンド製レンズを通して撃ち出されるだけだ。

高まるタービンの唸りとともに飛び出したガスレーザーは、敵艦艇、航空機を次々と蜂の巣にしていく。

「敵艦隊、ミサイルを発射！ 439発、さらに後方に同数を確認

！

「対抗手段！ 近接防御火器は攻撃目標をミサイルに変更！ 主砲は引き続き対艦攻撃を続行！」

コクトー大佐の指示に、878発のミサイルの進路上に、『エンタープライズ』のデコイが放たれる。他の艦からも、それに倣うように多数のデコイが放出された。

デコイは艦艇と比べれば圧倒的に小型だが形状、材質、塗装の全てが電波反射率が最大限になるように設計されている。レーダーで見ると限り艦艇とデコイに大差はない。囷としての役割を全うしたデコイは、ミサイルの直撃を受け爆散した。

デコイに惑わされることなく突破したミサイルを、今度は20ミリターボガスレーザー砲が邀撃する。無数の不可視光線が、ミサイルに突き刺さっていく。

連邦軍艦艇標準装備の20ミリターボガスレーザー砲、ドアルテ Mk.14は発射速度毎分3400発だ。巡航艦、駆逐艦各16隻が全力で弾幕を張る。ミサイルはその濃密な弾幕の中に飛び込んでくる。

878発のミサイルはその多くが、目標に達することなく撃ち落とされた。

だが、しぶとく防空網をくぐり抜けるミサイルも存在する。その数、41発。

第14話 艦隊対ミサイル（後書き）

だいぶ遅れてしまいました、申し訳ございません。
本当は4月中に更新したかったのですが……。

作中ではガスレーザー砲をカートリッジ式とターボ式にわざわざ分けましたが、実は深い意味はありません。

実際、原作では20ミリガスレーザー砲もカートリッジ式で統一していました。

作中にあったカートリッジ式とターボ式を使い分けている理由は、したがって、こじつけです。

しかし原作では6話で終わったフェルステル事変も気がつけば14話、しかもまだまだ続きそうな雰囲気。
いつまで続くのやら。

それではご意見ご感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2120o/>

穹界の剣

2011年10月9日23時40分発行